

第5回北海道開発協会助成活動発表会・懇談会

各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行ってきており、助成件数はこれまで11年間で84件になります。これらの活動をより効果的にサポートするために、20年度から、助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表し、参加者が地域づくりなどについて自由な意見交換をしていただく、「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。第5回を迎えた今年度は、23年度に助成を受けた団体を対象として7月14日に札幌市内で開催しました。以下は、その発表概要です。

土地の資源を生かした新たなビジネス

活動名：利尻資源蘇生の町づくり・新たな農業ビジネス創出事業

地元で農産物を生産してきた高齢者3名を雇用し、ジャガイモ、タマネギ、ニンジン、ピーマン、ナスなどの収穫作業を行うとともに、島内での農業の可能性や品質管理のノウハウ指導のため、農業アドバイザーを招聘し、勉強会を開催しました。

また、将来を見据え、地元住民や観光客の農業体験メニューの開発や文化振興を図るため、押し花インストラクター講師を招聘し、地元インストラクターに対する押し花手法を活用した押し野菜の技術指導講習会を開催しました。

さらに、利尻島の農作物の販路拡大のため、利尻ブランドとして「観光と食」に絞った可能性調査を、札幌市のJTB北海道商品企画部と近畿日本ツーリスト北海道支店を訪問して実施、「水産物を含め、利尻産の食材にこだわった食の提供は魅力的であり、ぜひ実現



小杉 道治 氏  
NPO法人利尻ふる里・島づくりセンター

してほしい」との意見をいただきました。

また、利尻町には知名度の高いコンブやウニ等の特産ブランド品があっても、利尻ならではの料理や土産品が少ないことから、観光客だけでなく地元住民にも提供できる「利尻まるごとオリジナルスープ」と「利尻の大地キャロットケーキ」を試作しました。

今後は、利尻産野菜の生産量を徐々に増やし、NPOの活動拠点になる利尻島の駅で収穫祭などのイベントを開催、販売し、利尻産野菜の安心・安全をPRするとともに、観光客に対しては海藻押し葉だけではなく、利尻産野菜もアートとして融合させ、新たな体験観光メニューとして普及を図ります。また、開発した料理を提供する、空き店舗を活用した「島の母さん食堂」をオープンさせます。これらの活動を通じた付加価値等により専業農家の新規就業者を育成し、本格的な体験農園の開設、活用を図っていきます。

“食べるエゾシカ”の普及活動の展開

活動名：エゾシカ普及推進プロジェクト

平成20年の「南富良野(なんぶ)エゾカツカレー」のデビューをきっかけに、エゾシカの缶詰を3種類、エゾシカサラミ、エゾシカソーセージといった商品開発をしています。エゾシカジンギスカンはすでに商品化されています。

エゾカツカレーはこれまで4万食、1年間で約1万食を販売。約8割が町外のお客さんで、2次効果、3次効果、テレビ・新聞等の掲載も含めると、3～4倍の経済効果があると感じています。

地元の保育所、学校給食にエゾシカを使ったカレー



鶴谷 大輔 氏  
南富良野エゾカツカレー推進協議会

を提供。また、地元の高校にエゾシカを提供、家庭科の実習授業ではオリジナルのシカ肉料理を作っています。さらには、富良野沿線の高校のPTAを対象にエゾシカの手作りソーセージ体験研修会をやっています。親子のエゾカツカレー料理教室も開催しています。

町外へのPRとして、札幌市のアリオや大通公園で開催されるオータムフェストにも出店。本年7月の新ご当地グルメグランプリ北海道2012（別海町）では、エゾカツカレーは、味・コスパ部門で準グランプリ、総合で3位でした。人気度は12地域中9位で、食べていただければ間違いなくおいしいということです。まだまだエゾシカに対するイメージにはマイナスの要素が多いところがあると感じています。

これからも道内外の方にもっとエゾシカを理解していただけるような活動を継続的に進めていきたいと考えています。

### 地域資源の活用によるコミュニティビジネスの創出

#### 活動名：苫前町の地域資源「ハマボウフウ」の資源復活作戦と海浜植物の活用によるコミュニティビジネス創出活動

ハマボウフウは江戸時代から食用、薬用として活用されてきましたが、近年の山菜ブームによる乱獲で著しく減少しています。根っこを途中で折って持っていくのが資源減少の一番の原因だそうです。取り方のマナーを守れば、資源を切らさずに活用できるということです。



按田 道範 氏  
苫前町ハマボウフウ研究会

平成22年から、立ち入りを制限して効果的に資源を復活させようと占有許可を取り、海岸線に柵を設置し、「海浜植物復元区域」を作りました。海岸に直接種子をまく方法と、畑で苗を育てて移植するという方法を、無肥料区、有機肥料区、鶏糞区と3種類のものを作り、栽培実証実験を行いました。有機肥料区はたった1年でけっこう大きくなり、素晴らしい成果を得ることができました。

また、瓶詰め加工を経験している講師を呼んで、ハマボウフウの甘酢漬けの瓶詰めに挑戦しました。また、ハマボウフウをもっと知ってもらおうと、展示用プランターを作成して、地元の小学校、道の駅、公共施設などに置かせていただいています。

もう一つは、ただ食材として取るだけではなくて、自然環境を学びながら復元させようと、北海道立総合研究機構環境科学研究センターの専門家によるモニタリング調査を体験しました。秋には石狩浜の海浜植物保護センターにも視察に行きました。ハマボウフウの乱獲による減少がきっかけで保護センターができたということです。

今後は、苫前産のトドマツを使った木製プランターを昨年と同じように、小学校や一般公募で里親になっていただく住民を募って、10戸ほどの家にハマボウフウのプランターを届ける予定です。

もう一つは、ビジネス化に向けた天ぷら用ハマボウフウのモニター試験です。今年度は苫前町内の飲食店4店舗、札幌すすきの2店舗に納品しています。天然物ということで、かなり高い評価を得ています。引き続きモニタリング調査を行い、花も知ってもらおうと、今年から新たに開花調査を始めています。

### 十勝の馬文化を体験・発信

#### 活動名：「馬車にゆられて十勝文化体験」事業

ばんえい競馬の存廃問題を契機に、馬全体を文化として認識してもらい、その馬文化の発信基地として帯広競馬場を使おうということで、馬文化を支える会は平成19年に発足しました。ばんえい競馬の応援にとどまらず、様々な馬の文化を全国に広げていこうとしています。農耕、



旋丸 巴 氏  
NPO法人とかち馬文化を支える会

運搬などに馬を使っていた時代に携わっていた方々の体験を聞き取り調査し収録した「馬文化新聞」の発行、学校に行って子供たちに馬の歴史や生物学的なことを知ってもらう「馬の出前授業」など活動も広範囲にわ

たっています。

今回の事業は、大人25人ぐらいが乗れる馬車で競馬場を飛び出し、百年記念館があるグリーンパークとの間を走らせました。片道1.5km程度ですが、馬車はゆっくりしたもので、30分ぐらい。地元の人や観光客に乗っていただき、馬文化を直接肌で体験してもらおうということです。一番危惧したのは安全面の問題ですが、万一に備えて、当会の会員で警備員の資格を持った交通安全のプロが必ず安全を確かめて運行しました。道を行くと、乗っている人はもちろん楽しいのですが、外にいる人たちが「馬が歩いてる！すごい、すごい」と言ったり、人が集まってきたりもします。もう一つ気をつかったのは、暑い盛りの夏休み期間だったので、馬に保冷剤入りの帽子をかぶせ、待っている間は水にぬらしたタオルを必ずかけるなど、熱中症対策も施しました。

一昨年競馬場にできた「とかちむら」という観光施設とのコラボレーションで、とかちむらの前に馬車は着きます。とかちむらで買い物をしていた観光客などがどんどん集まってきます。そのほか、小学校に出かけて出前授業をしたり、馬農耕を再現したり、馬に親しんでいただいています。

今回の馬車運行はインパクトの強い事業にできたと考えています。これからも帯広の風物詩として、観光資源として定着させていきたいと思っています。

## 歴史を生かすまちづくり

### 活動名：「北前ひな語り～歴まちのおひなさん」



室谷 元男 氏  
江差町歴まち商店街協  
同組合

江差町は、平成元年に北海道の戦略プロジェクト「歴史を生かすまちづくり事業」のモデル地区に指定され、北前文化が息づくようなまちづくり、店づくりをしようと、商店街活動を行ってきています。

今、私たちは「百人の語り部のマチ」を目指しています。このために

まず「きもの語り」を開催。どこの家にもある古い着物を玄関に並べ、「うちのじいさんが着ていた着物」「うちのばあちゃんが嫁入りにした帯」というようなお話をしました。このイベントには大勢の人がきてくれました。古い写真をコピーして玄関において、「これはお父さんが出征したときだ」とかの話をする「写真語り」も行い、研修で函館から中学生もやってきました。

その流れで、今回は「ひな語り」です。たまたま愛知県岡崎市の画家で柄沢さんという方と以前から交流があり、足助町の「中馬のおひなさん※」が有名で「江差でもできないか」という話になり、全国に不要なおひなさまを募集したところ、107組ものおひなさまが届きました。保管にも困り使っていない体育館に並べて名前を書き、さらに1.1kmの歴まち商店街のお店や個人の家に飾りました。30店くらいの商店街組合員では人手も足りず、ひな語りサポーターを役場や町民、振興局に呼びかけたところ、延べ100名もの方々が協力してくれました。

私たちの町には姥神大神宮があり、折居さんというおばあさんの夢枕に翁が立って飢えた村人のために「ニシンという魚を捕りなさい」とつぼをよこし、海に注ぐとニシンが来たという「ニシン伝説」があります。これには裏話があって、翁がおばあさんに「網を作りなさい」「網の大きさはあなたの背の高さ、網の目の数はあなたの年齢と同じにしてください」と告げたそうです。これは資源を大切にしながら持続可能なまちづくりをなさйтеという教えではないかと思っています。以前から「ヒューマンスケールのまちづくり」を考えてきましたが、このお話でやっぱり身の丈に合ったまちづくりをと思い、町の人たちと一緒に取り組んでおります。今回の「北前のひな語り」は冬期で初回でもありましたから、見学者はそれほど多くはなかったですが、おひなさまで全国とつながり、みんなで準備したのがすごく楽しかったです。

※ 中馬のおひなさん

愛知県豊田市足助町で毎年2月上旬から3月上旬に行われる。130軒以上の商店や民家など約2kmにわたり、土雛や内裏雛、餅花などを飾っている春の一大イベント。

## 米国式鉄橋としてわが国最古の幌内鉄道トラスト橋を地域資源に!

活動名:「幌内鉄道の鉄橋再生を目指す、人・歴史・まちづくりの架け橋」プロジェクト



石川 成昭 氏  
NPO法人炭鉱の記憶  
推進事業団

「鉄道のまち」岩見沢には鉄道にゆかりや興味を持っている方が多く、栃木県に移設されていた歴史的価値ある幌内鉄道の鉄橋を、平成11年に市民の熱意で岩見沢に戻した経緯があります。本プロジェクトでは、その鉄橋の再認識と利活用の動機づけのためのイベントや講演会等の活動を実施しました。

「パネル展」(9月17日~10月24日)では、鉄橋の歴史的な写真や史料、現状に関するパネルを15枚と、30分の1の模型を作成し、そらち炭鉱の記憶マネジメントセンターの石蔵ホールに展示しました。石蔵ホールは岩見沢駅でのイベント「えきまる」期間中のスタンプリリーの個所でもあったので、鉄橋の存在を知らない市内外の方にも見ていただけたことが大きな効果でした。

「部材に触れる体験」(9月23~25日、10月8~10日)では、駅前広場とマネジメントセンターに鉄橋の一部を展示して、鏝落とし体験会を開催し、予想以上の参加者に鏝落としを体験していただきました。解説員が鉄橋の特徴や歴史を説明しながら実施したことで、体験価値が向上しました。

「空知の土木遺産・幌内鉄道橋梁セミナー」(9月25日)では、近畿大学の岡田昌彰准教授を招き、地域の産業や文化活動に土木遺産を使っていくアイデアについて国内外の事例を紹介しながら、空知の土木遺産や鉄橋の保存活用に関するアドバイスをいただきました。

「歴史的な橋を巡る見学会」(10月23日)は、31名の有償参加者と複数の解説員により、鉄橋の現状や岩見沢近郊の歴史的な橋などを見学しました。空知の新たな魅力としての土木遺産の存在と幌内鉄道のトラスト橋の価値に関する興味や知識を伝えることで、それらが

地域の資源になることを確認しました。

「ブックレットの作成」では、パネル展用に収集した史料、既存の研究資料を基に、鉄橋の価値、歴史をまとめた冊子を作ることができました。パネル展、体験会、講演会、見学会の参加者、さらに、岩見沢市の教育委員会等を通じ、市内の学校関係者にも配布しています。冊子ができたことで、今後さまざまな場面で利用することが可能になりました。

今回の活動で「幌内鉄道の鉄橋」が再び実物や資料として多くの人々の目に触れ、再認識されたことは、非常に大きな成果となりました。最後に、今後に向けて、再生の方法や場所も検討しました。鉄橋は長さが30mあり、設置場所には全体が望める広さと安全性が求められます。さらなる議論や検討が必要ですが、岩見沢駅周辺がアクセスや利活用面からも条件的には有利ではないかと考えられます。

## 日本三大車窓の一つ「狩勝峠」の景観復活

活動名:旧狩勝線を利用したフットパス及びトレイルランの開催



増田 秀則 氏  
NPO法人旧狩勝線を楽しむ会

旧狩勝線の廃止日は昭和41年10月1日です。最新の技術で掘り抜いた新狩勝トンネル(約5,600m)に切り替わって廃止されました。

途中駅の新内駅が活動の拠点になっています。今は保存の機関車1両と寝台列車が3両置いてあって、トロッコなどを運行しています。廃止から46年たって、狩勝峠から新内までは日本三大車窓の一つといわれた景観ですが、今は木が生えてほとんど見えない状況でしたが、木を切ったりして、所々ですが三大車窓の風景が楽しめるようになってきました。

また、現役時代にあったアイテムの復活もやっています。まずはキロポストです。根室本線起点・滝川からの距離標を随時つけて回っています。

目指すところは、日本三大車窓の風景の復活です。狩勝トンネルを越えてぱっと出たところが十勝平野が

一望できる絶景でしたが、今はほとんど見えません。そこで、全部とはいかないにしても、所々でもその景色が楽しめるところを作っていきたいと思っています。

今年は、春先に狩勝トンネルから100mぐらいの区間の木を伐採、根っこまで取り去ってきれいにしました。新内トンネルの落合側の標高約477mのところに眺望ができるスペースを作りました。狩勝トンネルの新得側にも作りました。そこは標高約512mです。ちなみに、新得駅は標高188m、新内駅は標高334mです。

昨年10月、道の開通にあわせイベントを実施しました。落合側から狩勝峠を越えて新内駅まで歩くものです。狩勝峠を越えた辺りから雨になりましたが、みんな気持ちよく16kmの道のりを制覇しました。

昨年11月には、廃線跡と林道を使った狩勝峠トレイルランニングを実施し、参加者は75名でした。今年5月にもちょっとだけコースを変えて実施しました。175名が参加しました。

今後の展望です。廃線跡の草刈りを継続、現役時代の標高標や勾配標など各アイテムを充実させ、なるべく現役時代の雰囲気や損ねないように景観を維持していきたいと思っています。また、信号場では反対側から来た列車をかわすためにこうしていましたというような、旧狩勝線の運行システムまで調査してデータを収集していきたいと思います。

今、山の中の草を刈り、木を切って、昔の住居跡の基礎がだいぶ出てきました。その基礎を寸法取りして、資料館の中に鉄道模型によるジオラマを作ったことで、信号場での交換風景などが再現できるようになっています。それ以外にも、新内駅に保存されているSL1両と寝台車3両の維持管理を行っていきます。

## エゾシカ問題の解決と消費拡大に向けて

### 活動名：エゾシカ肉を活用した新しい地域特産品の販売開発に向けた検討

釧路地域ではエゾシカの増加により、原生林への食害や農業への被害、自動車事故など、さまざまな影響が出ています。その一方で、エゾシカ肉は、価格が高



桐木 茂雄 氏  
釧路湿原・阿寒・摩周  
シーニックバイウエイル  
ート運営代表者会議

い、臭みや固さといったイメージが先行して、消費がなかなか進んでいません。そこで、地域社会のエゾシカ問題の解決と消費拡大を進める、新しいビジネスモデルの構築に向けた検討として、エゾシカ肉の地域特産品開発に向けた検討会の開催とマーケティング調査を行いました。

マーケティング調査では、ウェブと記入式のアンケートを実施しました。126枚の回収内容を見ると、道内からの回答が多く、男性が半分以上、年齢階層では30～40代が半数を占め、食害やロードキル、エゾシカ肉の有効活用の認知度など、エゾシカの社会問題に対する認知度はいずれも高いということが分かりました。また、自由記入欄には、エゾシカ問題に対しての意見が多く寄せられ、意識の高さも実感しました。

こうした調査結果を踏まえ、新しい特産品、新しいメニューの開発を行いました。私たちのルートでは、各エリアにシーニックカフェという、ちょっと寄り道をしてお茶を飲む場所を用意しています。カフェの取り組みの中で試作料理として、今回はエゾシカ肉を使ったジャージャー<sup>めん</sup>とコロッケを作りました。このうちジャージャー<sup>めん</sup>は弟子屈の冬祭りで試食してもらい、「もうちょっと辛味があってもいい」「臭みがなくておいしい」「ご飯にのせて食べたい」「もっと個性があって豊かな味がいい」と、いろいろな意見をいただきました。初めて食べた方にも、おおむね好評でした。

今後の展望としては、試作品の商品化です。現在、釧路市阿寒町でシカ肉販売を行っている阿寒グリーンファームと連携して、お土産品として販売できないか検討しています。また、シーニックカフェと連携したメニュー販売を行い、ご当地メニューになる、観光客や地域住民のニーズに応えられる魅力ある商品開発を行い、ご当地メニューとして、わかりやすいネーミングを考えてPRしていきたいと思っています。